

第2学年 生活科の実践

1 単元名 「うごく うごく わたしの おもちゃ」(全12時間)

2 単元目標

身近にあるものを使って動くおもちゃをつくり、友達と競争したり、工夫を教え合ったりしながら、自分なりに改良することを通して、動くおもちゃのおもしろさや不思議さを実感するとともに、遊び方を工夫しながらみんなで楽しむことができる。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題・・・切実な問題意識を持ち、友達とひびき合いながら学習する子どもの育成

手立て・・・・子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業作り

ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」

・人の言動に何かを感じる姿 　・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

《聴く・話す》

自分の考えに自信を持って友達に発言することができるようになるために、朝の会での「日直の話」や帰りの会での「かがやきっ子」など、自分の考えを話したり、思ったことを伝えたりする場を多く設定してきた。話し合い活動では、聞く・話すのルールの徹底を行ってきた。自分の意見を言う前には「言ってもいいですか。」と始めに言うことで、聞いている子どもにも意識を持って取り組ませるようにしている。また、友達の意見を聞いた後は、「いいですよ。」や拍手をするなどの反応を返すということも行っている。他にも、授業の中でペアトーク、グループトークを取り入れて全員が発表できるような場を設定してきた。

聞く・話すのルール作りをクラスで話し合って設定したこと、自分の意見を言う際の言葉掛けはできるようになってきている。また、「言ってもいいですか。」ということで聞いている子どもも意識を持って聞くことができるようになってきた。

《関わり合い・ひびき合い》

生活科の「1年生を迎えよう」では、自分の成長に気づきながら、アサガオの種をプレゼントしたり、学校案内を計画的に行ったりして、1年生を思いやりながら関わってきた。また、「どきどきわくわくまちたんけん」では、少人数で探検の計画をしたり、分かったことをまとめたりする活動で、グループの友達と多くの関わりを持ってきた。

自分の意見を言いたいだけ、という子どもが多く、友達の意見を理解して聞くというところがまだできていない。そのため、話し合いの深まりを持たせるために、発言した子どもが「何を言っていたのか。」もう一度他の子どもに聞いたり、良い意見は「もう一回言ってみて。」と伝えることで、友達の意見に耳を傾けることができるようになっている。

4 単元と指導について

①単元について

学習指導要領の内容（6）の解説では、「草花、木の実、石、水、風などの身近にある自然や、紙、空き箱、ストロー、割りばし、輪ゴム、磁石などの身近にあるものを使い、遊び自体を工夫したり、遊びに使うものを工夫して作ったりすることが主な活動であり、その過程を通して遊びの面白さや自然の不思議さに気づくとともに、みんなで遊びを楽しむことができるようになる」と述べられている。それを踏まえて本単元では、とくに身近にあるものを使って動くおもちゃを作り、みんなで遊びを「楽しむ」ことをねらいとした。その中で、友達と競争したり、教え合ったりしながら、自分のおもちゃを改良し、さらにレベルアップしたおもちゃで遊びを楽しみ、動くおもちゃのおもしろさや不思議さに気づくことができると考える。また、様々な種類のおもちゃを作ることで、気づきの質も高まっていく。このことが、第3学年以降の理科の学習に生きていくと考え

る。

友達と遊ぶ活動の中で、おもちゃに合わせた遊びの場を自分たちで考えたり、ルールの必要性に気づき約束ごとを考えたりすることができるであろう。また、一人で遊ぶより、みんなで遊ぶことの楽しさを十分味わうことで、友達と関わり合うことのよさに気づくことも期待している。

②指導について

うごくおもちゃ作りをしていく中では、自分のおもちゃを友達のものより「もっと高くとばしたい」「もっと遠くへ飛ばしたい」という思いや、「うまく作れない」「どうしたらいいのだろう」という思いを持ち、そこから新たな気付きを見出す学習となるだろう。また、おもちゃが完成すれば、うごくおもちゃをより工夫したり、ルールを作ったりしてみんなと楽しく遊びたいという「切実な問題」が生まれてくると考える。

このような切実な問題が生まれるためにには、自分の作ったおもちゃで十分遊んだり、試したりする時間が必要であると考える。そこで、まずは自分のうごくおもちゃをたくさん作って遊ぶ時間を確保する。作ったおもちゃを通じて、友達と関わりながら一緒に遊ぶことの楽しさを味わうことができる。そして、一緒に作ったり、教え合ったり、遊んだりする中で、友達と関わることの良さを感じることができるだろう。そこから、おもちゃをもっとレベルアップさせたり、大会やおもちゃランドのような遊びの場を自分たちで考えたり、ルールの必要性に気づき約束事を考えたりすることができると考える。

自分たちで遊びを十分に楽しむことができれば、「遊びランドを開きたい」や「一年生を呼びたい」という新たな切実な思いも生まれてくると考える。遊びランドを行う、一年生を迎える、という目的がしっかりとされていることで「楽しくやりたい」「一年生に喜んでもらいたい」という気持ちが芽生え、「そのためにどうしたらしいのだろうか」という切実な問題となっていくと考える。

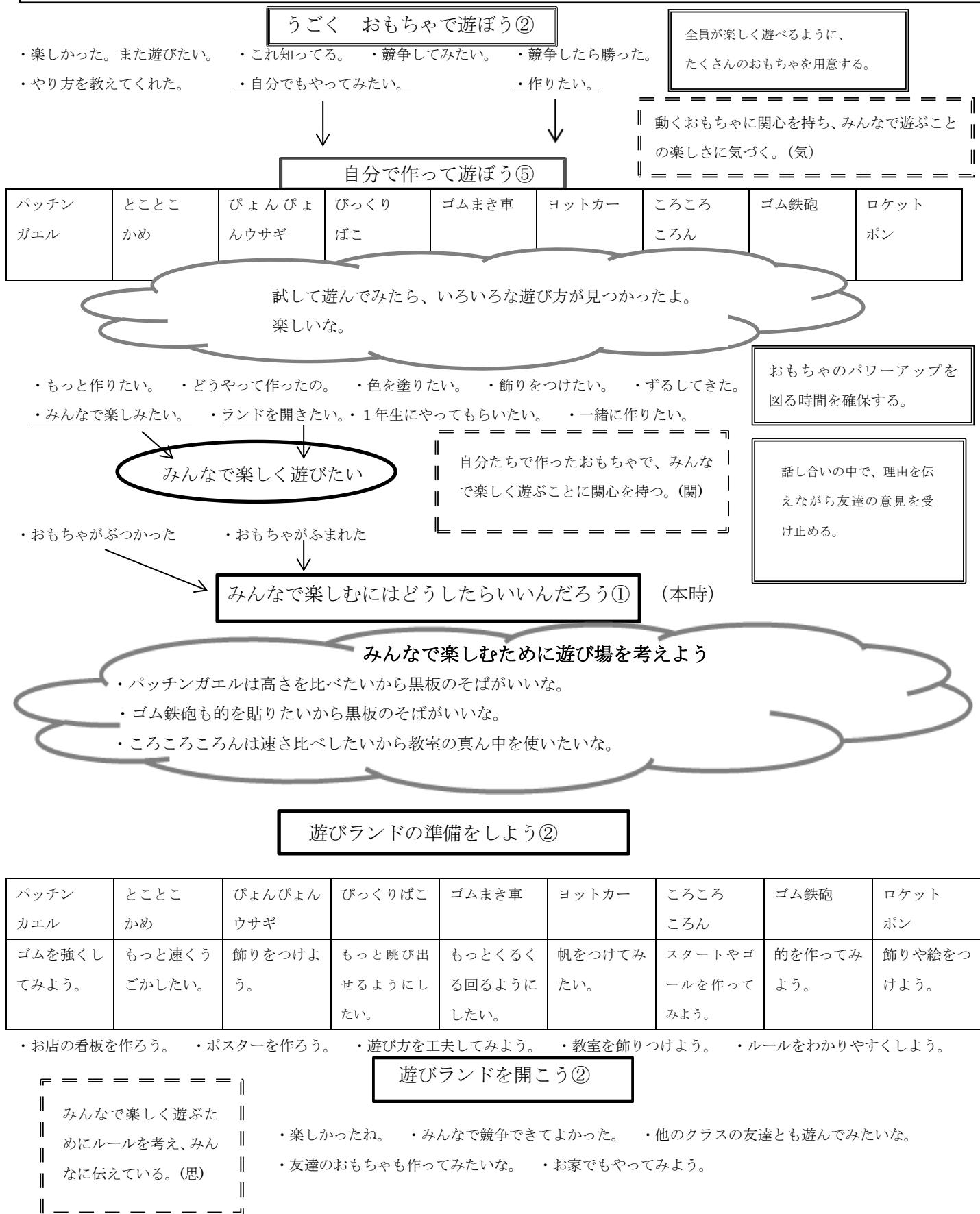
周りを意識して行動することができない子どもが居るからこそ「みんなで楽しむ」ということを意識させていきたい。また、普段学習に意欲的になれない子どもも遊びによって興味関心が持て、活動に取り組めると考える。

メリハリをつけるために、本時・次回やることを明確にして授業を進めていく。

5 単元構想 第2学年 生活科「うごく うごく わたしのおもちゃ」 全12時間

単元
目標

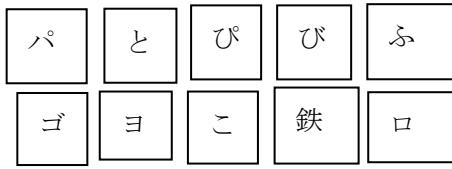
身近にあるものを使って動くおもちゃをつくり、友達と競争したり、工夫を教え合ったりしながら、自分なりに改良することを通して、動くおもちゃのおもしろさや不思議さを実感するとともに、遊び方を工夫しながらみんなで楽しむことができる。



6 本時について

(1) 本時目標 遊びランドを開くために遊び場の工夫を考えることができる。

(2) 本時展開

学習活動	主な支援・留意点 ◇ 【評価】
○学習のはじめに、前時で困っていたことを振り返る。 めあて 「みんなで楽しむためにあそび場を考えよう」	○前時のときに感じた不満を思い返して、みんなで遊ぶためには遊び場を決める必要があることを確認する。 ○今日のめあてを確認する。
○チームで話し合って自分たちの遊び場について考える。 ・ゴム鉄砲はゴムが飛んで危ないからオープンスペースを使いたい。 ・ヨットカーはどこまで走るかを競いたいから長いコースが取れるところがいい。 ・ぴょんぴょんうさぎは高さを測りたいから黒板の近くがいい。	○前回の活動を思い出しながら、どの場所で遊んだらみんなで楽しく遊ぶことができるか考えることができるようとする。 ○全体での発表の前にチームで交流し、話し合いに慣れて自分達の意見に自信を持つ。
○全体で話し合って「2－2遊びマップ」を作成する。 教室の図  	○おもちゃ別のカードを活用し、どのチームの意見かわかるようとする。 ○意見のぶつかったところはクラスみんなで考えていく。 ○「聞く・話す」のルールを意識して話し合いをする。 ◇おもちゃランドを開くための場の工夫について、自分の考え方や意見を発言しようとしている。
○完成した遊びマップの確認をする。 ○本時の振り返りをして、感想の交流をする。 ○次の時間にやることを確認する。	【関心・意欲・態度】

7 実践を終えて

《子どもとどのように単元を作ってきたか(本時まで)》

はじめに、教科書に載っているおもちゃを教師が作って紹介し、みんなで遊んだ。実際におもちゃで遊んでみて、子どもが「自分たちもおもちゃを作ってみたい。」という興味関心を持って学習に取り組めるようにした。

子どもは作りたいおもちゃの材料を各自用意し、おもちゃ作りを始めた。「作って、遊ぶ」時間を多く設けることで、自分のおもちゃを試したり、自然と友達と関わったりすることができた。友達と関わりを持っていく中で、「遊びランドを開いて友達と競ってみたい」「作ったおもちゃで1年生を楽しませたい」という思いが出てきた。1年生を招待するためには、まずは自分たちが楽しめる場を作る必要があるという理由から、最初に遊びランドを開くことになった。遊びランドを開くことに向けて、遊び場の必要性に気づき話し合いを行った。遊びランドが終わった後は、振り返りを行い、改善点を1年生を招待するときに生かそうということになり準備を進め、1年生を招待することとなった。

《成果と課題》

単元全体を通して、児童はおもちゃにたくさん関わることができた。作って遊ぶという時間を多く設けたため、興味関心を持っておもちゃ作りに励むことができ、上手くいかない点などは友達と教え合いながら取り組むことができた。そうした中で、「遊びランドを開きたい」という思いと「1年生を招待したい」という思いを持つことになった。1年生を楽しませるためには、まずは自分たちが楽しいと感じるものを作らなくてはいけないということに気づき、おもちゃの工夫をしたり、場作りをしたり、遊び方のルールや看板を作ったりし、「1年生を招待しよう」というめあてに向かって、みんなの思いを一つにして進めることができた。

本時では、遊び場を決めるために同じおもちゃを作っているチームごとに話し合いをし、その場がどうして必要なのかという切実な思いを持って、話し合いを進めることができた。「楽しく遊ぶために必要な場の工夫」という切実な思いを持って話し合いが進んだが、すんなりと遊び場を決められたチームにとっては他人ごとのようになってしまい、話し合いに上手く参加することが出来なかつた。そのため、「全員がどのおもちゃでも楽しむためには」ということを意識した課題であれば、より話し合いが深まり、ひびき合うことができたと考えた。対立しているチームの意見だけを聞くのではなく、第三者からの意見を取り入れることで話し合いをより深めることができたと考える。一部の子どもたちだけの話し合いにしないために、教師が「みんなはどう思うかな。」というような投げかけを行い、どの子も意見を持てるようにしていくことが必要であったと考える。

また、遊び場についての話し合いだったため、頭の中で場所のイメージを膨らませて話し合いを行うのではなく、その場に実際に移動してみることも必要であった。そうすることで、より切実な課題となり、遊び場の工夫をすることにもつなげることができたと考える。